

サー・クロコダイルが転生者だった件について

歩く好奇心

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

内容はタイトルの通りです。ネタの二番煎じにご注意下さい。

第  
3  
話

第  
2  
話

第  
1  
話

目

次

10 6 1

# 第1話

俺ことサー・クロコダイルは【元七武海】⋮という設定だツ。そして【転生者】であるツ。ここにおいては後者の方が大事だツ。俺ことサー・クロコダイルは元日本人ツ。【ワンピース】という漫画も知っているツ。つまりは分かるな？　じやあ説明不要ツ。

さて、さらには設定だというのも割かし大事な話であるツ。元七武海じやないのかと聞かれたら肯定しようツ。そうであるツ。今の俺ことサー・クロコダイルは元七武海ではないのだツ。

なんなら海賊にすらなつていないツ。何故なのか？　怖いからであるツ。以上、説明不要ツ。

海賊がなんだ。財宝？　この世のすべてをそこに置いてきた？　馬鹿野郎ツ。それを夢見る前に人類を超えた能力者どもの存在に膝を屈したわツ。あいつらホントに人類かツ。

いまやこの時代、海賊志願者は自殺志願者と変わらねえツ。お目めキラキラさせて目指すものじや決してないツ。

じやあ今の俺ことサー・クロコダイルは何をしているのか、という話だツ。日本人の感性をしていれば安定を求め、普通のモブの人間として日々を送っていたことだろうツ。

しかし、それもまた否であるツ。この身はサー・クロコダイルツ。サー・クロコダイルとい

う存在は悪魔の実とひかれ合う運命にあつたらしいツ。

そうであるツ。俺もまた会つてしまつたのだツ。悪魔の実にツ。その種もまた「スナスナの実」という因果なものであつたツ。そして食つたツ。当然だツ。あのワンピースの悪魔の実が目の前にあるんだぞ？ そんな面白そうなもの食わないはずがなかつたツ。無論糞マズだつたツ。

悪魔の実を食べて砂人間となつたのは青年期のことだつたツ。能力者になつたから大丈夫であろうという根拠なき自信から賞金稼ぎとなり、海を避けた長旅に出るツ。

それから十余年、俺ことサー・クロコダイルは四十路へと突入し、そして今、アラバスタ王国へと足を踏み入れようとしていたのだつたツ。

## 【10g】

### 【ナノハナ】

アラバスタ王国、ナノハナ。砂の国において海沿いに位置しているこの町は、交易の玄関口として重要な場所であるツ。故に人口も周辺の町に比べ多く集約しており、人々の活気に溢れていたツ。

水の供給が潤つているツ。いわば、ここはこの国における数少ないひとつのおアシスであつ

たツ。

## サー・クロコダイル

### 【10g】

「マスター、オススメのワインを一杯」とある居酒屋ツ。そこは砂の国特有の石造りの店舗を構えており、内装もまた砂漠国独特の品々に溢れているツ。

俺ことサー・クロコダイルはそんな居酒屋にてワインを注文したツ。この居酒屋に始めて来訪したのだツ。故に何が上手いのか知らない以上、バーの主人に任せた方が良いと俺ことサー・クロコダイルは考えたツ。

しかし注文を受けた愛想のない中年バーの主人はなぜか困惑げだつたツ。

「どうした主人。早くオススメのワインを出してくれ」

そう促すツ。

しかし、へ、へえ。と、言われましても……

、と愛想のない中年バーの主人はなにやら歯切れが悪かつたツ。こちらを見ては何やら言いにくそうにしているツ。はて、俺ことサー・クロコダイルの注文に何か問題でもあつただろうか？

今度は俺ことサー・クロコダイルの方が戸惑つたツ。

「どうした？ なにかワインを出せない問題でもあるのか？」

バーの主人は言うツ。へえ、オススメと言わ  
れても困りますあ。ウチにそういうメニューは  
なくてですねえ、とのことであるツ。

「……なにい？」

俺ことサー・クロコダイルは大いに戸惑つた  
ツ。

なんということだツ。そんなに融通が効かな  
いものなのかなツ。俺はワインにそこまで詳しく  
ないのだツ。これでもなんとなくでしか飲ん  
でなかつたためか、ワインについて詳しく知ろ  
うともしなかつたツ。

ちつ。仕方ないツ。俺ことサー・クロコダイ  
ルはありきたりなものを一つ注文するツ。しか  
しつ、バーの主人またもや言つたツ。

……いや、それはウチでは扱つてないでさあ。  
と、まさかの撃沈ツ。

「じゃ、じゃあなんならあるのだ？」

そう訪ねる俺ことサー・クロコダイルにバ  
ーの主人はこう言つたツ。メニューボードを見て  
くだけえ、と。

完全なる隙のない正論ツ。メニューボードを指  
差すバーの主人の視線があまりにも呆れたも  
のであつたため、俺ことサー・クロコダイル  
は羞恥で悶えそうであつたツ。くつ。いつ  
ものように格好つけようとしたのが裏目に出  
たかツ。

周囲からもクスクスと笑う声が上がつてい  
るツ。チクチョウツ。隣の美人さんも俺のこ  
とを堪え笑いしてやがるツ。キツと俺こと  
サー・クロコダイルはその女を睨んでやつた  
ツ。

「あら、失礼」

美人さんはクスリと笑うと澄ました顔でワインを煽つたツ。ニヒルな笑みが様になつてゐるところが憎たらし……つて、え？ な、まさかツ。こ、この美人さん、もしかして。

俺ことサー・クロコダイルは凝視するツ。

艶のある黒色の長髪ツ。彫りの深い顔つきに力強い目付きツ。高い身長ツ。特有の浅黒い肌つやツ。

見れば見るほど間違いなかつたツ。この美人さんはツ。俺ことサー・クロコダイルは確信するツ。

「……に、ニコ・ロビン」

これはとある能力者の仮初めの物語

この世は設定という運命に縛られる。故に必然だ。 そう、彼女との出会いは必然であり、運命に縛られた結果なのである。

サー・クロコダイル

## 第2話

ニコ・ロビン。俺ことサー・クロコダイルは確かにそう口にこぼしたツ。そして彼女もまた、その身体的特徴からニコ・ロビン本人であることは間違いなかつたツ。

「ツ!! どうして私の名をツ?」

警戒心を露にするツ。彼女、ニコ・ロビンの目付きが冷たいものに変わつたツ。無理もないツ。彼女は現在進行形で指名手配中なのだツ。

その金額、まさに7900万ベリー。それを目をすれば誰もが目を皿にするだろうツ。庶民ではまずお目にかかる高額すぎる高額であるツ。

彼女は遠い地から遙々このアラバスタ王国に逃げてきたのだツ。彼女の顔は一度全国に見られてはいるものの、話題になつたのは随分昔ツ。遠いこの地にて、彼女の顔を見てその名を言ひ当てられる者は滅多にいないに違ひないツ。その警戒心を大きく高めるのもまた当然であったツ。

「……そう、そういうことね」

ニコ・ロビンは言つたツ。なにやら答えを導いたようだツ。

「まさか、もうここまで追つ手が来てるなんて。私も随分嫌われたものね」

「な、なにい?」

「悪いけど、私はまだ捕まるつもりはないわ

俺ことサー・クロコダイルは慌てたツ。

「ま、 まで。俺あ別にアンタを捕まえるなんてーー」

「ないとでも? 私の正体を暴いておいて、それでも捕まえる気はないだなんて、貴方は嘘が下手ね」

冷たい皮肉ツ。俺ことサー・クロコダイルは困惑したツ。彼女ことニコ・ロビンの言つていることが何一つ理解できなかつたからだツ。突然のことには頭が回らないツ。

しかしこれだけは分かるツ。俺ことサー・クロコダイルと彼女の間に明らかな誤解があるとツ。

なんとかしなければツ。俺ことサー・クロコダイルは慌てたツ。とりあえずはと、待つたをかけるツ。

「ま、 まてつ。とりあえず落ち着

「触らないでツ」

警戒心を剥き出しにガタリツと椅子を蹴倒すようにして彼女ことニコ・ロビンは立ち上がるツ。

「ドス・マーノ（二本樹）——」

そして構えたツ。二本の腕が俺ことサー・クロコダイルの両肩から生え伸びるツ。それらは俺の頸を捉えると在らぬ方向へと曲げようとしていたツ。

これは首の関節技ツ。

知つてゐるツ。俺ことサー・クロコダイルは転生者故に知つてゐるツ。彼女ことニコ・ロビンは能力者だツ。

パラミシア（超人）系の悪魔の実ツ。種名、【ハナハナの実】。その能力の実態は自らの身体

の一部をあらゆる場所を問わずに咲かすことが出来るこ<sup>ト</sup>ツ。

この技もまた、その応用であつたツ。

彼女ことニコ・ロビンの関節技が決まるツ。

「——クラツチツ!!」

P a a a a s s s y a a a a a a a a a  
a a a a a a a a a n n n n n n n n  
!!!!

「…………えつ!?

細やかな砂が多量に飛び散つたツ。彼女ことニコ・ロビンはその光景に驚くツ。きつと想定していなかつたのだろうツ。無理もなかつたツ。本来、能力者など滅多に会うものではないのだからツ。

砂煙が周囲に舞うツ。俺ことサー・クロコダイルの首から上、俺の頭部はそこになく、代わりに剥き出しどなつた首の断面から砂がサラサラと流れるだけであつたツ。

本来であれば首が伸展可動域を越えて、血を吐くような関節技が決まつたに違ひないツ。

しかし現実、それはないツ。

当然だツ。

俺ことサー・クロコダイルもまた悪魔の実の

能力者である。

ロギア（自然）系、【スナスナの実】。

「悪いが効かねえな。……俺あ砂人間なもの  
でね」

これはとある能力者の仮初めの物語

悪魔の実には相性がある。……格がある。パ  
ラミシアがロギアに叶う道理はない。

サー・クロコダイル

### 第3話

これはとある能力者の仮初めの物語  
決まつたと思ったのだ。……しかしそうは  
ならなかつた。いかに恵まれようが俺は所  
詮は凡人だつたということである。

サー・クロコダイル

B a N N !!!

開閉音ツ。居酒屋の玄関扉が勢いよく開け放  
たれて、人ひとりが走り出ていつたツ。

「なッ!!ちよ!?おい待てッ!!」

それが彼女ことニコ・ロビンであると理解し  
たのは遅れて数瞬のことであるツ。俺ことサー  
・クロコダイルを自らの手で対処するには不可  
能だと即座に判断しての行動か、見事な食い逃  
げであるツ。あまりの意外な行動力に俺ことサ  
ー・クロコダイルは呆気にとられるしかなかつ  
たツ。

しかしそれを見て、食い逃げダアアアアツ、  
とバーの主人が怒鳴り散らすツ。怒るのも当然  
であつたツ。

俺ことサー・クロコダイルも慌てて彼女こと  
ニコ・ロビンの後を追おうと駆け出すツ。だが  
しかし、途端にその腕をガシリと強く捕まれ引  
き留められたツ。バーの主人であるツ。

アンタの知り合いならアンタが代わりに払つ

てくれよとのことであるツ。いやなんで俺がで  
ある。つか別に知り合いつてわけじやないんだ  
が……。

説明はするがしかしバーの主人は取り合わな  
かつたツ。しまいには通報するぞと脅され、善  
良なる俺ことサー・クロコダイルはしぶしぶ折  
れるしかなかつたツ。なけなしのお金を財布か  
ら取り出すツ。

「ちきしょう……、なんで俺が……」

支払いを終えた俺ことサー・クロコダイルは  
店を出たツ。

「あんのやろー、許さねえ。きつちり払つた分  
は返してもらうぞ……ニコ・ロビン」

俺ことサー・クロコダイルは設定とは異なり  
秘密結社を作つてもいなければ社長でもないの  
だツ。余裕はないため金の貸し借りについては  
厳しくさせて頂くツ。

俺ことサー・クロコダイルは地面上に手を置い  
たツ。砂であるツ。砂漠国である以上、地面が  
砂にまみれているのも当然であつたツ。

スナスナの実。砂人間である俺ことサー・ク  
ロコダイルにとつてこれほど都合の良いことは  
なかつたツ。

全ての砂は俺の味方であるツ。

「……グラウンド・リスペスタ（砂漠の反響探知

）

砂の地面を歩くことによる発生する足音を捉  
えることで、相手を捕捉する技であるツ。砂の  
地という砂漠国だからこそ行える、まさに環境

が味方してこそ使える技であつたツ。

目をつむり視界を閉ざすツ。視界を閉ざした真つ暗な世界ツ。国中に広がる砂漠の上を人々が歩くため、足音が波紋のごとくそこらじゅうに点在しているのが伝わつたツ。歩く人などそちらじゅうにいるのだから、足音が多発して伝わるも当然であつたツ。

そんな中、俺ことサー・クロコダイルはしかと捉えたツ。ここからそう遠くない場所ツ。俺から少しでも距離を離そうとしているかのように常に走り続ける不規則な足音だツ。

「……そこか」

確定するように呴くツ。居場所が分かれれば後は行動あるのみツ。そこに向かうだけだツ。重い腰を起こすツ。無論、わざわざ走つて追いかけようなどと俺ことサー・クロコダイルは思はないツ。

能力者とは、常に自らの力がいかに便利に働くのか考えているものだツ。俺ことサー・クロコダイルもまたそうであるツ。

砂の力があるのだツ。それを使つた方が断然早いツ。

風が舞つたツ。自らの身体を砂埃のこどく粒子と化すツ。俺ことサー・クロコダイルは風に溶け込むようにしてその姿を消した。

食い逃げは重罪だ。身に染みて実感した。被害を被るのはなにも店側だけではないのだ。  
そう、……俺の財布である。

サー・クロコ・ダイル